源語畧說

原本歴年多矣而誤寫亦不勘矣余也不便于國字私意以牽強写則恐失古人之意故總治舊不革一

源氏物語

光源氏のきさきをつくりそめたる
はじめ仁皇六十六代一條院の御時なりそのみか
どのおとゝは東院とやらかのその御妻女房
式部といふ人つくりまゐらせたるかとまうきさふらひ
ぬ方あるのはつねなきものなれどさる面白のの
かゝりもなきもむつかしきものなれども上東
門院に式部をめしていとなるさまいうもをろかに
おぼせおはせまゐらせと紀式部やうなるはめなし

宮曙文庫

字也君
孔察諸
方鼎謹
識

ぎりめづらしげいふもあるべきつくり
おしてぎりて国つのくにとやたちばそふて
そかくひてこもかくもつちいざさまもの
おほ野なりはさくはなりてはいりとや
はめひ家むあふこのほ石山の観音ふさん
ろくしてぜひぬきせいやさるおろくす
板の月ろうれおもむうびく国なく
あきくうなるをうれふ武部ふたろもそ
やうふきよくなりしばかくのごくてん

ぎひ六十ぎふよそくてうまをを六十帖ふさ
免やまふふくに名をうくてつちるふ一方の
うかど六代のおひざの月も白も月を
あそをやうぬきぬきふめづくをもきて
してこまをのれふよそくに名をかくて
書づまて世ふつくだやはおのふかに
ううびぎちの武をるも石山の風りしやう
なの風尾一式説ふ光源氏ふあるるうかか
ちくこうびぎちいふは山尾しの紀

說なりけり。流のうもれ
ぬるまゝにて大般若のゝ[illegible]
なりて坂ゝ武ゝ[illegible]
第三皇のむ[illegible]
ゝつゝたりてゝ[illegible]
まゝらいづゝ武都[illegible]
んの宮めゝ[illegible]
氏とゝ[illegible]
平はあほゝ新王の[illegible]

ゝんゝゝいひゝゝ人の子なりもてゝとゝ
かゝゝゝんみて人のゝなゝゝびなゝみめ
かゝもゝ世ゝゝゝゝゝ武ゝ皮れみもゝす
ゝへかゝゝゝゝ[illegible]氏の大將いへ
ゝゝゝゝゝ[illegible]ひなゝ平ゝ二条又條乃
二人のかをおゝゝゝ[illegible]ゝゝ源氏の
大將ゝゝゝゝゝ[illegible]院ゝゝ[illegible]
ゝのびのひゝゝゝ[illegible]
ゝゝゝゝゝ

或説には延喜のみかどの御子に西の宮の
左大臣といふ人ありけるが人にすぐれ給
ひらん家んのうちもてかすこの人を
にして源氏の大将とつくりて西の宮は
ほどありて筑紫へながされ給ひしを
はかりしれをいたんで源氏を須磨あかし
に三年しづみおはえたちをよそへ
五十四帖のものがたりとせし女のよ我おしる
ぬるやまひをあらはし君も臣もゆかりある

をもくなるをもつら入てはかなくて
世のありさまをしるせらんにはんちやう
をひきて人のおもひをつくし詩歌はさらなり
も管絃のしらべをもあらはし八橋のたなづく
春の花の木ずゑのこずゑにほひそのこ
しげは秋の月の手さびし外まてにくま
なかすべし色をしり情をふくむ人のみ
つまりはそのおもかげをよせけるむ大かた
源氏といふことはみなたとへにもある事

なり給ふ程ほどもなくほ〻ゑみがほなるべく
さぶらへかなくて后宮とし〻さまふ所にて
たゞしめて氏をやふけのふゆへなりみかも
と氏ぶく歌をすかしもゝ源氏なる此ものがか
さぶらふかうぶりをひうちの殿源氏と名づくる
身は源氏なりてのふたりも七ぢいの時
なりたいまへうちつけて武君をこうてまつり
めでさぶらき殿はすることはぢ〻てひうちの
殿ぶく名づけやさぶらひ〻まへなりたゝ

色八六十帖なりすることはせぶかりてあまり
大切のまきをゝでゝ〻ぶりて宇治のはし
ぢ〻かたゝ色〻もたりしば今八名をも
しるべ今ハ此なりたる五十四帖をいまもつる
ふなりはのはぢ〻の名者一百を源
氏ゝ〻ゝ〻ふ
一きりつが　二たゝ木〻并　うつ蜻蛉
三つむ〻さき并　すゑつむ花
四ゝ〻もの賀　五たゝ紅の色む

六あふひ　七ほうき
八花ちる里　九ほそま
十あうー　十一月をつくし　うゝび
せゝ武尾よそぎふ
十二見あはせ　十三ものの風
十四うもれゝそ　十五紅ぶ
十六おとめ　十七むらさき　并　ゆか
十八うゝ見ぐゑ　十九菊のうゝえ
廿　つゝな　廿一かしハ木
廿二よさぶえ　并　きぐむし
廿三夕ぎり　廿四みのり
廿五ゆまぼろし　廿六くもゐよりすゝ
六帳八次第不同小宇治のほゝぢゝかこめ
らもて今の世ゝ　ぢゝ廿五ゆかせ
うつる屋ー
廿七うゐる中将　この巻号部ゝゝ　并　紅梅竹川

宇治十帖

一 さしぐし　二 しるべの姫

三 あぜまの君　四 ちりぢり

五 屋ごもり木　やどりぎ　六 あづま屋　七 うき舟

八 ながろふ　九 ながなひ

十 夢ぢうきさし

以上五十四帖光源氏一部なり

あるひハ世八帖なんどすることをひきわかて

志るしをるのくろうどなる拾ひ物も

あるべしとて宇治十帖ハ別ふかくのがれく

もたしふかえてなすなる難ぎるべなりと

ふとまたとれ紙ふのいさゝもちがひめをべ

かゝぎゝうゝびなくかゝりてもちひ

なふべし

大うち　そしぢ　たくのく　こう筑

西のうへいづもたれハ内裏の御名にて

ハ泊ぬふ屋ゝうへとはみうぶくの惣名なり

きうもつおなじくうもつは内裏をいふ
なり大うもつは御所なり

上達部　大将左衛のうえ殿上人うへんのうえ

五位六位かゝ下官をいふ左右の大臣内大臣
大臣の唐名をおとゝいふなり一の人とは太政
大臣関白などをいへりやとはいふは
王子の總名なり春宮（トウグウ）はたの度王子なるべき
ものなり中宮といはをいふなりさは一代ふ
一人なり女房はいとさうもうべし内侍のうえ

せんしこのなんどいふ女房は女房の位より
一ひちぐべしはは尼なかてはは三番の女房
なりうういと云女房は内侍より又一ひちぐる
べしはは女房と云へるとり命婦といふ
女房は更衣より一階ひちぐべし五番のい
ときうもうへの名をばいふ小中将の
命婦　四条命婦そとまでは命婦
そうくらんなり六社のわしをは女官といひて
つぎくおはし采女義人こ称なり

女房なり大きゝとゝぶけるはおとこも
女も一〜なあづうりゆあもしばなふの宮
殿といふなり此女房もしもつ〜きゝ所
ゑ大きんゝゝいもひて別かはり女房のたち
ひなるべ〜男のたちぬゝひなべ殿上といふ
おほゝもみ所きるゝ四十八殿といはりみうども
まゝまきゝ南殿紫宸殿又つ承ふまし
所きゝ清涼殿なり弘徽殿麗景殿兼香殿
なゞ〜云ふは女所きもいうちづきゝなふ

所きゝろざゝあるる女所の所きゝ名ハみうとも
つひふおゝ〜まゝおなり此うもふ桐壺夜壺
梨壺梅壺藤壺紫壺四中八のうもなれども
つぼゝなづらゝ〜たり四ふハ日本國の名
所を弘ふうつさゝ紫ゝるとゝ〜くものうへ
さゝ〜所ん名所の歌よゝのふ此もゝ〜云

五十四帖を名付ること

一のまきをきりつ壺て名づけゝるゝ又は
ひゝる源氏の所ん〜きりつ壺ふきゝのひし

更なりきうの蓋より更衣の扇なりうもハ
をうなをうのうぜうの　なびるたるうも
ろうひふたうやうなるうこ　なでしたり
嵐ふめ扇れうるうもなつかしうこ
たうのうういとおうの形げうなうう　さうべき
風あそびの時も　つたうるの扇の袖を
琴びとなつかきなうこ　たうなういひ
いづるたうの嵐ふも人のさうぐまうのうこ
うばみかうたうびなきうのうさうめうし

唐衣たうくうの紀を附めうというみかどをバ桐
壺のみうのうこ

文様のうの嵐吹むもうぶ風のうふ
こ萩ぐりうの段おりひうそやき
此奇のう文様のうれなうの名所うまうこ
萩ふつうのうておうそんうこううの嵐ふきうもう
ぬうこ秋のすうの扇うのうぜ風ふめうこうもうの
うこ吹ハ嵐もたび風ふるうといふうなうの風う
のうこうをうこ嵐ふうこうあうの歌をうみ

たづむるものなり
二の巻をたゝぬぎとゝ名付るこゝハひる源
氏いつゝおとゝしゝなりのひゝこ孫もも
の思ひこのゐ所ゐ人ゝこゝ三人まいりてよも
ぎかゝ思ものがたりやらうことあわたゝハ
四月ゐつなゞあゑ物ゐてつきゞなるおう
かゝりのゐさい社をあるよゐしゐ世ぢめとも
又たゝ歌ゐのよ孫乃ゐと歌ふとまだゞ家
ぎうゐ品宣こゝれハたゞ女のようきあるゝ

ゐそんなゐ世の中ゐあるものなゝひとて
ゐかき思所ひぎのたくゝう思ゝのゐ
ぎとふまいとのこゝるゝ社なゐ女まま
ゝたゞのつゐたのむゝ歌をゐゝゝ
いこゝ思ゐさゝ孫ゝ加ゝもゝ人の品ゝゐ
ぎゝ如ゝこゝまれのゐゐかゐもハ
ぎゝゐいゝをゐうめなゐうとゐのゐゝたゝ
かゝて男をゝゐくゝ孫ゐる女ハゝゐふ
ゐめゝ女ゐ又おゝゐいのゝゐたのゐゐ

なくとも見え渡りし髪のかゝるかなら
ずおもひてつゝ左たゝ十あまり八十までハんね
志のぶべし祇ゝ和るもよきことかくになる
らふにいふ歴き如しをおしはじめてよく
かゞひきあなをへしやまごしなふところそ
きこそさゞめぬりしきびしくそうふぶふ
るゝ人の阿ら所ことおす恨も志ゑだしれ
かどはつゝみさゝちはさふおのうめしれ
家しまふもちなゝぐゝてこそ楽なり

いざさ山どもちのつゞくおやかりはるお
とたいつねぬをし女も男もたやつさきて
おとくにしてふさはかりでなき純だ男の
ちゝろもおさまりもそおうも五戒まもるを
りたりぞふべし人のたゝるもそてまで
志てきたるばにこそをのく一男のん
をくはしと志らでなきなげる女は
光とのもしからぬてみかり何のあかしそ
乃され何ちまり たゝ楽さそくなふ

祝ひなるべいよ〳〵男のさいそばしま
さるべしそこでまた女をさいとゝ祭さるな
ぎなどよりもかりうつの十のこゝをたんめん
いひのたびたびまた夕べもつもしやうぞも
ずいぶんふかしらへやうわかおりん時も
いよ〳〵おもんぱかりたづかしげかりてなも
へしたちあのるぶつくしがたし此
あり板のはらまれ春よりの夏ふ
うるまりぬんふて源氏ふうきとの

いあるじの中さかゝよりなるへも
その源氏しのびいりのひしうがも此女
さゝ法づよゝてぬかゝ今うの源氏ふうのひて
後口とれぞもとのかゝ悪しくも祝ふ
くもおばあしてまた又うたづゝておそし
ぞうの氏こびやいるよりたのめぬうちまぶ
も女はかゝそいうゝいゝ所しゝ家れども
おとゝいもそ中原夕ふればとふうゝ中
ゝ物おもひなるぞしゝおりひてこよひ

いでもうひてあひたてまつるうゐを
よそたちやまかふこずゑのさくら花てさ
ゆるをさくらぎぐ名ゆゑはさくらのはな
ゆえて木のもとへ花あだかなるもてこえぬ
ゆゑなる花ぐ比女をさとへなして源氏物
中将
さくらぎのたぐ泊るしぐそのさくや
こちふあやなうまどひぬるこゝろ
しなのゝ國そのさくらぎ
つくるあつかやうれてとうあはせて
こゝろみるふべし返るゝ女
かぐなるぬぬやをふるゆゑのうさふ
あるふもなるぐ我ゆるさくらぎ
見えてうれしきもそんあるふなるまば
よあう二のなるび　うけきみ
ゆつきこと名づくるこゝ比せんのさくら
の女ゆつまなるゆを源氏比せくつ記
ぐぐおぼしてうのびておハ

さうさいよひハやう心をそめ〳〵ほし〳〵むうして
碁をうちもつてほを源氏うぶまこのつかさて
さうもよぬ〳〵ちづまして板ぶんぐ志のび
いちのふをさそや〳〵たつけてうへふ我てぬ
〳〵さるうもぎぬをぬぎ和てさうひか
くまふ〳〵源氏つよく〳〵めー〳〵ほば
〳〵てかのまゝむをめ可その板ほちく我
ぶまひぬぶをてさうー〳〵きぬをうう
てくちのひておくまゝ我ほ可ー〳〵ぶんぐよう

ぶつきゝ枝をくてなる木のもとか
な我人かゝくうかゝまゝ郎
ほをぶかゝもちかきて
うゝせみうたをゝ我の木かゝきて
ーのひゝふぬ我ゝ袖のか
きぬをぬぶをてゝたひうゝ社ぬまぶせ
みのそぬもかゝくへきう氏女ちゝまて
の君ゝゝ又ぶつきゝうゝいへう同ぶゝび
ゆふぶか

夕ぐれとなるまでハ夏のひ源氏五條
のうへの院めのとの家のまへを牛車を
もてゝたてゝそのうちの女房なと
なをさゝやかにひぐるまもうちはらいをるさまを
あをきはかりにいぬのひバ玉のうてなをも
云もおかしうてまぎれつゝ夕のけしう
きもよをすなりけりおなじひなゝをへうかゝ
なをかゝるかゝるたゝをとゝきやうりお
しけなるをかしさにたゝしろうのひて

涼しく家なるかあをうゝしきもよをかし
きをひかりたるかたるをきろを花をの枝
ひとうをゝうちよりひゝけたるうちのひ
らゝゝさにをゝをひておもる
ゝるをゝかるゝ源氏さいはんかんの歌か
人かのかとをもそゝのゝかんかんの歌か
ゝをもうをゝをもうをゝをかりのやに
なかふをのおをゝをゝをかをゝをは
何の花をもゝいふ歌のつかうまもうをゝん
をはあをゝをうをりをのゝをなうおもうをもと

とうあるをていふ時まなほ源氏此花を
ダグイと云るをいまゞ思ふ人ぬ
おもへば思ふともなるまじんいとくる屋をま
へふつゐてばかりいたるをタゞのかゝ中もる
はるゝ我こへ出ず一度ばかりてまいもとお
ほきゝまくらよりておもむとるに
こゝにはらもつゐたるあるのいとう
たゝしたるをさ〳〵おしてゐぐるなるけ
なうもうるをれなるたゝ殺ふおきま

いゝをよまてとゝ歌ゝうゑんじれ
あふ歌をこの花ばな女のてふて
たゝ訪あてふそれかとそゝる白露の
ひうろへる歌中ふるのゝれ
源氏をばひう原君とやそかゝる殺ゐ
たの歌をよみなるたるゐやと思ふろ
こゝろうてたづるものてかゝひのひゝなう
此女房をもタグふはらんと係ゐそを
まきこをゝ名はたう
三ウもゝ思ふと

名なるは本歌ふ

むさしの

草はこなかむつまきの郎

こいふ哥あつさ祇ぶ京つだの

かげ〳〵日の子とゆ山るほとたてのあう

ちまを新々ふれ さめてたしく

おもひ〳〵めへる北山なふ〻ぶ

きへ春の喜ふおたもるふ十ばう

なるひめぎみかうつや〳〵ふあふぎを

うるやふ字つくしてひきいつまよ

ふもつきふこ〻〻ふけふておひゆ

うんきべゆかゝ〻〻さびめのうをふゞて

なきうゝ枝のうゝも源氏思〻おぼ

さ新〻ほまそふふうふ〻ふの京

の恋めいなうそれゆうなればいよむ

つま〻てつひふたひうのひて小乃

うゝと宮めのひ〻なうゞん〻

ふつうていつかもむうゝのきの

新しかるべきのわら草
根はらみどおれば枯れぞ思ふむさの
霜置くまゝの草のゆこのうを
ひゆうにかりてむしくさもなづくわ
うくはさぶらうしゆくわうの歌くおかう 并
すゑいむれ
すゑいむ花のほくとてぐんじの小の
きおくしまくほかからもこの外こぐ歌
しくなんねぐけをうくほうなぐくれ

きかくのびるそうはきをこしかづみ
て紅をつけるやくふあくくてゐぬ
ぐんぼけいれほのうめれとえをひし
なわ源氏をなれそめをひしるぐ
くやくわばくれだも人のわども
かくけなくえはたのむくれたよう
なれかてまくゆくれバつまぐふを
てくバ光れかひほはのをうくのバ
むくなほ家だかわふかのくれうぐふ

めでたしといひならはせられのさまおほかた
たとへを花ちるひの花にたとへて家ぐし
なつかしき色ともなしになにゝこの
すゑつむ花を袖にふれけむ
まき紀を名付るゆゑも古歌にへなる
四そぢの賀とは源氏の院もちてこかど
五十にあまりたまひしかうな月に朱雀院
行幸をなしたてまつりて院ぜんありて
ことゝもかんざしもめでたきやんごとなき人へんがく

みまひをそかしてめでなしやまひし時
源氏の中将青海波をまひたまひしか
らてふは源いとこの頭の中将あひ舞なり
古歌をゑらまし以人にをぐまめへまで
源氏にこもなりしびて哀れのうらみ
こりや木のもとかくてまひしなり入日の影
さしたるにかくれてまさらず中将の
ほうは色いよく光をそひておなじく
まひのはしぬるおりもちもよ心くひ字

つくづくほうぶつのめみもぢはきもちゃ
ききてほうのかほひかおりつたきば
左大将ほうぜんの草をおりてたしうえ
ぬひ〜ちりぬるもじはほあるべなれば
ゆうもれ賀と名付ようぐんの市る
六のまひの字　我をかの女つぐいぐ
ほうぜんぐ字もじとしつぐつなぐてしのびて
女房通へほうぜんなりつ
ゆれわひふもふぐるあぬ男の

袖うもりぬうたろうきゃ
今ぐ袖うもりぬ子ろてたろ〜ゆ
ろうたふかるふふうまう
五たれのえん大ろえんといはそのまれ
をりてちやをいふなつ桐壺のみ
うどなんてんのさうれほえんをうきふ
みふうもうんぐうもめうれ歌をひて久
ほうぐうりぬひうりぬうことは詩をつうぐ
なり源氏の君春とふんぐ〜ぬてのこ

まひし侍りける人にまでくばれその名をも又袖
くまとよんでそのころかに桜をかざして
まひあそびしはうきさ月頃同とよるもん
このちぎりやはいかめひかへして侍りて
母の菱つぶの女御
おほくさんれのそがらをとりまつれば
哥語もさくろれをかきまゐらしや八
ごほうのこもちぶおほしけり皇まつたの歌
それの意んれ哥なり六あふひと名付る

るはかまれ祭のたいとをさざる巻なれバ
様の日れたるだしなれバとりまさてふべし
源氏侍とものへ以へかざやくばかりにおもち
て葵の丹院の侍ともふりうなびしかば
古社をよこ堂てなる躰もとて為中への
ばかつどひましてほれるふもさかろふさ
まふるくはくるまれもちさへふ幸しや
してのかたぶまつる袖もちども見ものな
りほんさびの小のうさあふひのうへ此又六條

のゝやまとゝくるまをさしてあゝそひぬひ
しるそれはなすゝうゝもとゝ所にはくるま
をゝいまゝゝ拾てそのまんえんぐんぐの
てゝちのふをもはをぶやまゝ所もくも
おゝくてみやとゝ
かゞまをゝにゝ堂ゝゝ川の一色なきか
月のゝたれぐ〳〵ぐいとゝ土ゝゝ
こゝよゝゝて拾ゝゝいきとゝ拾ゝをめゝ音か
なすゝうてあふひのゝゝをゝうのひゝなすゝ

かも川にゝ堂ゝゝし
川ゝゝまゝなすゝうゝ
まゝゝまゝゝ
車ふてゝゝゝゝなひゝをとゝ走ゝる所お
ひゝのゝゝまゝるゝ拾ひゝゝおゝて
あふぎのつゝを拾てかゝて所車へゝいせ
音ゝ

えゝなゝゝやゝへのかゞゝるあふひぬ
神ゝゝ所ゝゝの音ふをゝもゝ今所
ゝゝ拾ゝゝあゝそひといへゝ日吉乃

まつもふる枝の緑をかうふりて
なゝびのはてあふこゝにあふひてうつと
をうぢゝふるつゆゆへおろかつゝ歌ふも
よまゝゝなわるかうふりのつゝみはえび
あふひ草もゝえびゆかゝくゝ京へのぼり
のふぢゝあふひともゝゝちかの老る
女房の返事 源氏の大将
かざゝけふんぞなぐふおほゆゆ
やそもぢんふなへてあふひを

八中氏人とはおほゝのんかあふひをゆ
ふかうそのはゝ侍るぞ高きみやゝしゝ
ゝてゝぢゝあふひをゝふゝあゝばかを
なべゝ
七ぢゝ木ゝゝはるるうハのゝゝ
どうもきてゝゝ六條のゝやゝ京ぎん
ゝをゝゝぢうてはゝもゝめれぢひゝかゝ
つきて伊勢へゝぐぢうのひゝ 附 源氏ぢう
木の枝をいさゝゝもつて見せたゝゝ

さいめんあつまりてとをくゑをてのぎ
なりうやをを所
神ぐきはをるしるしなきものを
いふまぐておきふかうをぶ
柳のことはしといへども此歌をふたの
木と名なるれををうかををもふをく
をを反秋冬を述懐を神祇釈
教入いろいろまじりをを雑といへり
神ぐき井かるなどをもむは神祇るじ

のことをいふむのは伊勢国の都より
みてはるむをあなぐぐうぬひし
その時のほをみうなりいるもあとさが
ふるをしまはどしやうじんをと
ふつかう八花ちふたとをなるは
源氏のふのこと六條京極ちふ
をしもるをといふ所住ひしなり
花ちまこをを反のあるあえ式はる
ちはををのたいちををがひて人を

をへぬひゝ時も夏のよもふけまゝのひ
ゝなり五月五日の名づゝきさたるふ
さの所へ源氏さてうのゝ屋ふかゝゝ時
鳥なき紀貫之しば源氏

さもこれのうをなかうゝきはゝぎす
さもれもるゝゝ花をうづゝ花てそゝふ

九源氏とこれ巻をいふは源氏のたゝ将
君あり朱雀院のゝ女御ふゝもものふ姫君
をさう巻でんれはそどのかてあゝさたに

おかゝぬゝウ女も京ゝんゝをゝのゝゝ
おぼゝ男のゝもあさかゝずおりひるひゝ
ゆゝふゝ世ふあゝハれて源氏の君よたて
のゝいきゝをもぬゝゝてゝやたふはかなふ
よゝ起よゝゝゆえはきゝだやよひの水ロあ
ゝウれ以つの國ゝ方のゝゝおゝびき
殺ひゝゆえなウれふゝふゝれ屋よウはくる
事の三月十三日まゝでゝ世ゝてひるのを
ゆゝひゝぬひゝなウ ひるゝハ いかゝゝ 以ゝゝきゝでん

のほそどの、女房をあまたあまひしてあ春れ
ゝ明の比なり

てらもすずくりもたてぬるのあけ
おぼろ月あはふしくれぞなれ

こいふの新乃月をはぞそびぬひしーゆえ秋月
夜の内待れ君とも又ゝ秋の君こそ見れ
乃人こそほんふ夜なりもとなるといふ歌れは
きゝ中ふ此おほ流月れの使ゝこの使ゝ
ふ源氏

乃ゝ中宮の御の湯のうゑめを中ゝ祭
ゝほやゝまゝ乃ゝ中ゝ
此文の返ゝを中ゝ中納ゝといふ女房の方
ゝれ久の中ふ入てもゝ見へゝんゝせゝ
もゝなゝ涙ゝ乃のかゝしゝぶゝとゝれ
をゝふゝきふやゝまゝ
なゝ伊勢のゝやゝを所ゝゝ乃ゝ
ひをゝんゝづゝゝ紀をめゝふゝひゝ
伊勢ゝれ源ゝふゝやゝを所

宮ばめうる伊勢おのありを思ひやも
そしはるるてふさとまの浦へ
めをバ伊勢海をほへふよめるおふをも
うらのりをでうるといふよくでだのつ
くとはよむなしほ草をなゝ唐息所
伊勢鴻やゝ志ほひのうふあうりも
いふひなもハつゞ男なりうら
海のうぶハなふをつとなむもあさ浦なり
いちりおなゝるすゝ山ちりふ山ちとなのきう

なんゝ見えぬるつ火たゝかとをいくる
なりつ十おかゝとゝなるるゆハたつゆまのあ
かゝのうゝへて海を三月十三日唐船て
ゝうつゆひゝなつ唐むゝふあゝの入と
いふへのうゝよつたい社をとゝよゝの神乃
多の岩ておどゝ船きてもいさやうな船
船をまいゝ船うゝ船んゝ六の唐船す
のつゆへふうゆてうゝ唐のみの日のたゝへ
うつふうめゝくゝる風ふうゝもたうゝほぬ

かんどふてはうふきあやしさ風
はそふきてふねあふふつきの
波たようあのうちそひとるおどいへ
ごもろこ時のまそつまのひめ船ようち
車ようつまふねふほどはやうはし
あずうはのうふきんじ北かうもを尺
きてやつるようあうしの入乃そ花を
うまそ社よいひあのふがふもしてそ吉
の神をかつぐおぐうてまつりうあう

ぴ入乃ひとうむまめをもうふふふも
してうやこのたうねんかきてまつん
とおうふ祝ひひぬうきゆ色すうこ吉へのう
をみて京ん〜おをえうてまつるる月
はのひうかへおうんむまめのうをこハ
ぎかうよ馬まへまてゃうこ社バ源氏をて
ようちるべき女とこうてをまのひ北て
な社ばさうぶみちしふねをようふおうき
ひとを祝のなぐさうとのうまへばうつぐ

宮社〜くてゝ入る
ひとゝ伝ふ君もとめゆゑつまづき
おのひあすれば〜ほひ〜さを
古社おう〜のゆきとれ名の歌なりかくて
ひむとめはひとしめてきゝて宮んじ
のほひとゝ姫君ゝ代人のたてなりて
なゝきゝなきもの〜ひ〜すかをめでこ
十二の巻を分をつく〜と名なるる源氏
ゆゑおう〜ふこゝとせるゝのひてゝやふ

くらのほうのとの位よりもかどまもり
さくのへば信吾へ信敦たゝ〜ふはうでた
よひ〜る九月十日なりけれ北〜風
ちゝうれあか〜の浦よりはう〜のう
船よて信吾へまうで宮ふかんりあひ
たゝ源氏もおちふ〜おほ〜めせども
いうめ〜きほ小我ほひなれ形あひうゑ
べきやゝな〜宮ん〜れほめのとこれ
こやゆ〜いふ天上人てよい〜そほうたんなま

ぎ法師をゝまてぬるまふかとなれば
ぬるゝ涙かつらゝかゝ葉をのもつて
法車のもへまんゝ動らう法たゝうかゝ
りあすは北法ゝへ源氏
月をつゝ大ふるまふ〳〵ふかまでハ
めぐり来ふゝ原見ふハぬゝ礼
えふゝふ色んのみなうみをつゝふ
船つなぐ木を滝のあ法ふたてをゝを
いふかうひ法ゝ〳〵ふ法ゝ動ふ法ある法

くゝあまうおほかるゝ出なゝるゝうえゝ
いゝゝてゝ

十一のなゝび閑屋

軍屋と名付る車あさゝ礼軍なう神
な月の法源氏の内大臣殿たゝ〳〵す
あふゝの国〳〵山へまんうぬひ〳〵おうゝも
かのゝぬゝまゝうゝ宮つきゝの姫君おと
ふふゝ〳〵ていゝもの国へくゝぶうゝるゝるゝや
こゝへのぼるゝてあふゝさゝ礼毎ふて源氏ふ

ゆきあひ給てまつ保其夕方人めいうめ
くてわりひながら宮もつる〜ふ又の日
い〜山よりほかなりていれ〜よりほ文の
つひ〜まる人をめ〜よりて宮つきこ
のこと〜家へ〜
にくらぶもあふもたゆ城たのこゝも
さ玉うひなり〜やはなぬみ
ひとくらぶはたまさうなるゆなりあふ
みのくゝい〜山ふこれがはなぬぬ

そよみのひ〜なりほ返〜うつせこの女
あふさうの角やいうるる物なれば
〜ぜきなびよの中をわくむ
ぜ女この巻ふなまてなりて源氏のこと
たのこかてまふりきりいあ〜のかう流
つよ紀てゆをハ宮もてて源氏さうべき
ほくふきて〜をなのひてほとゆきた
あのくそくなんど祈ひのよふこうち
つくあひてをこるハせのひつ時〜もち

よりて馬場ぐらうだゆうなりてあるふ
なりのひさ原なりなりさ原をうもなげき
つくゝりのひゝなりすりかつ我あるこのひゝ
人をゝなりなりこゝをもをすてどまつめのひゝ
土のなゝびき遊生
此よりよりもきふと名なることたいぜんふ
それあゝくゝめゝろゝおたゝよゝをを
へつむそれの原るなりなりの源氏せよあ
ゝふこゝと野なりて又ゝりの原りの

のひてあるゝ義るのひゝうだのゝとゝよりう
あまたゝとゝ原ゝとこゝんゝごきゝるのせゝ
ゝとかりりたゝりよりかゝもをあゝハゝふく
ろゝ北て京軽々ゝゝなゝゝあゝゝ乃
京りりの宣ゝりの卯月のすゑ源氏
をばゝゝゝでゝゝりのひゝ時よりぎゝ
京りて京ゝりゝゝゝ入のゝ屋ゝよりゝも
なゝゝとゝゝゝまゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おりのゝゝゝて

たづねても見まて我とはめこともなく
ぬるよりもきのねくるしさこゝろを
これこの琴るのもちふて流さこきの家
をとりひて此をなしゆしき申思ひあきてゐる
たとへふんなきもきゝふれやどくしふなり
十二弦合と名付る事たれ此まちふ思はせ
あるなかり家んしれその家がくの一部ふ
王位四代なり　太上天王 これもそうつぶの ふかどいも
朱雀院 一の院子すそ まし〳〵　冷泉院 これもそうつぶの こかどの十人の御

子ふてあしますそ 朱雀院の院の弟也　今上 これハ朱雀院の子 そうつぶれ院すこし
此上四代ふて源氏五十四帖るとめせかゝり
思ふあハ勢ましいぜいの院時なり歌文の御
桃たるたかし めしてあしふも とさなり 一人して
弦をまはせんふきちてちんしきんの
つくえふさへたり此ひくもふハ大内れ女
房んくふがくのかてうちまく家の定め
をあく我ひきり弦のうそぞうりこゝぎ
すうぞくあかしかふ伊勢物のかゞみ

の絃なるひゝいゝ風ゝ　たけえのお
きなのゑうゝ風ひめつゝへゝ源氏平家
あすゝぬゝゝゝふて　ホのそさ海をも
をよんぬ山そくまなく弦ゝかなゝが
月ゝゝ花をも四きのよやゝすゝく
の高なんどうきのへゝけいるでふゝゝ
あてゝ猪のひゝゝゝ桜花宮のほゝゝへ
ゝゝゝ花きゝゝゝゝつゝ弦の風ゝゝゝ絃か
うゝゝあゝ社ふおゝゝゝゝてひゝゝかも

ぬへゝ紫のゝへゝ心まゝすゝて琴弦をえん勢ぬぬ
ゝゝ弦ゝをのゝひて
ひゝゝねて欲ゝゝゝもあ乃ゝもむ
かゝをかゝてゝみるべゝのゝゝまゝ
お絃をゝゝまおかゝゝゝゝつゝ弦といふ風ゝ
十三ゝゝつ風と名をゝゝあゝゝのゝへ姫君
三宗ゝでゝあゝゝふゝゝゝんゝゝゝゝ
ほむゝへゝゝゝて京へむゝへゝのひゝゝゝおは
井の里ふゝゝゝゝゝゝゝゝ母のあゝ

のあるあれたためおうもれ家なるあう
〜のあるあ

月なうへてひとうつれるる里が
さ〜〜ふたるあつ風そふく

此歌なとやいふ〜〜もその法意へ
さがり侍たゝえぬひてそれ人侍まつう
くはえうつれいんとえ云ふうつふあうて
ひうの會などなう又大井かあうれうく
をそてかようひたよくバえ云ふうまてなう

きぬひ〜なう皿皮雲と名付ること
と此巻ふまん〜れ侍ものびんの茂意
かう社ぬへう春のくまれう〜のうき
くそのうをて〜かうひきりて〜をうあ
をえぬふ侍油の色よそへら社て源氏
なれく〜ぬふ

入日はそうふかたるび〜侍ふは
ものおふ油ていうそようへあ
此歌ものえなう此巻ふうう社ぬへは茂意

をもうせしその女院と申すなり
十五あさがほと名付る巻は源氏の君いと
こふ姫君一人ましくけるがきんじ宮に
うけるへまどはらもなくてかはき秋にぞ
おりかゑへかきれまきに斎院となりて
すとれてくそこ我の家といふ所にか
へりそゝ給ふ源氏きみの君く彷徨はれ
はらくりて祝めでかにゆえなふさうり
ぬくさおしたあさがほをおもひ寄す

源氏斎院のもとへ
見しおりの露わすられぬ朝顔乃
花のさかりはすぎやしぬらむ
此歌ある名付られたるにや
十六乙女の巻と名付る事をおとめは
天人の總名なり大内に五節といふせち
會にかくもちそくされる女房十四人なり
なるをあつめ殿上にて舞をなさせらる
あまく天人をかなすびて装束をそのへ

さらつ五節の舞姫といふ所ひめ姫を
乙女のそぐふ〳〵いつ十六の巻ふ所せもち
〳〵この沙汰なり源氏のちやく〳〵夢
の思ひよりつ大将とやせ〳〵舞姫のうちなる
かゝ〳〵ものるこふ
日ゝ宮ふもしぼうけめやをとめゑが
あゝれたる袖ゆうをしさくろは
こゝろれあかりともたのせもゑなり
十七ゑうゝれるすそゝめ夕かほのゆ汰を

女房源氏のものとふてをうなくおなり
ぬあゝそなハれふおぼゝてその人のうゝ
をきゝ姫君をゑんゝむゑよ物てきむ
ゑめ物りと人ゝひろゝてうづゑ
ゆひゝりむゑよ物ゆゑやゝきたいめん
ありかゝらふ所まひおひよりもんふゝて
よゝゑゝゝ見えなゝゑ気ふむの物
ゝゝのゝゝもゝ物ゝおぼゝもてゝ
ひふ源氏

越こしの新方もとをれなづまをうづ
いなるをとこ〳〵ぜたづのさめる毎
式歌ゆえ玉うつ〳〵と名をうち
玉うづ〳〵れなづびをつ形
をつ初ゆ〳〵名をうるをうるを正月のあう
しれ人の思うをうちうち思もをめの姫君の
うをえをえ〳〵れやり小学るの巣をくひを
新ぬやさ白をつくうて思るみふ
小う月をまつふひうれてふるんふ

うをうづひまれたつひきをきを
とあう一有り名をするをるやを
同なるびたて〳〵胡蝶と名をるひは
崇の〳〵は春のはのをんふきめたをふ
さ歌ふよりて思をを〳〵所ふを五えをはう
をひ搗やりぬをえれのををうへな
しををのりてあそびのれををてのへ
ぬへう源氏の思いをいなるほやを
なひもをめふ〳〵ぬひ〳〵秋文の蔦は

秋をとゝろふりあぬ〳〵ぞほとゝぎすなかなう
たて〳〵秋は野もをたるゝふをつくつゝ鳥
まへの山もゆみぢのもをつくゝそやへ
たかへつきはゝぎだの井ゆあかりは比
山秋はのむさゝぎのほゝゑ紫のはな歌
よりほゝゆゝゑゝつはゝ秋のゝもぢをば
ひふゝふふ入て紫のほゝゑ春をふひゝぢし
秋をはめゝるほゝゆゝつゝそのはなん
とゝえて秋をくだりてほせゝそこを

ほいひひうへたゝハ八人蝶〻鳥〻をゝ
なうそきゝとゝて鳥のゝゝそへはゝゝが
祝のかゝゝ振さゝて営をつけてもゝ又
蝶のゝゝそへゝたゞのゆゝのえんふやゝかぬな
をはゝて蝶をなてゆもつてゆいゝゝ紫
それそのゝさてふをさへやゝ草ゝ
秋ゝんむゝはゝゝゝみゝゝゝ
さきなさてふの春のあそびといゝちさて
ゝて巻をゝゝゝゝゝゝ

同なじほうる
蛍といふを源氏のお
ゝ丶兵部卿の宮と中納言の君たち
つゝみ姫君をはじめとおもふて
よりてゝんをつくしのふなりかもの
つくゝもをはのふ丶ぶていよ〳〵つまぶ
をはんとかまへなひてはるをクゞ花
よりおはゝつゝみをも姫君はやへう
つゝもゝゝてゝるもゝ式部のふゝせなひ
しゝまれゆゑゝなるゝ花まをよりはるれ

兵部卿宮とゝやゝうゝまゝれ返てすか
てゝゝそせで分をのゝふいを蛍てゝ
いふのまゝるおもひなるゝ名
かやうゝれ車ゆゑゝなゝ　同并ここなゝ
どゝなゝゝ名付ゝるゝを玉のつゝれ
ゝゝこのせん栽よれ草〳〵のそれをゝん
ちせゝれずなでしこの父をゝのゝ
かゝれやかゝのうへつゝてゝ勝をな
いのゝゝゆひなはまゝうさまゝこゝれ

たるなどへいとおかしくて源氏おと
よしてをるめのふ
なでしたいのこゝろつゝ紀友をこそ
のとれやうぐきをんやとゞめぬる
式歌中色姫君をもこたいなつの姫君いう
同るゝびかゞもとゞ火
たゝい秋のてふもなかりて萩のおもやら
ゝおふもなるほゞふもゞの浪さふて
源氏ものとも琴をなゝしのふ

とゝて琴をまゝふてつかゞ火の音ひ
をゝしよせやう水のゝとりれやゆゝの
木のさゝふてゝもはをれゝあう
源氏
ゝゞもゝ大そうもそふ恵の音ふう秋
せそうハさゝきぬ不のをなつ音秋
かゝふの音ふのうて名なきこう同并
形ゝう　のゝさゝゝ八月ゝはゝく風
のふく事あう秋ごゝうさゝゝあうゝく

はるかぜいづまれ手ぶうもおどろとと
おしなべて吹おてとなくれこ萩さしを
なくきもつえるぬの音きなりおき
かつら寄もたるれよどふ吹ちこ涙タ
ぐまふ扉ぬきもちやくるぬよ野て
かくれかかつくふ源のくのえしちく
せんざいの吹みぶれをおしうてなごめ
ぬふきくもを源氏の志ちやくしまめど
の中将のそばてくるひくきさろのあ

くがましのひしなつあらちまでふはひらも
て寄こうれるものくをれやうるものよ
秋ぞ稚だつ志くしれかちなんどハ
などいたで横ふ光とくても花とぐれた
ま春の明かのふ寄あのなちさるこぐも
くれさくふのくち野とまの久のお
うげといふはたれかおうの高はあうれ
へのほ宮くまて源氏のことひたうち
ふてうもるものくれ宮くめしくて

しやうぶをうゑたるにはのしのうへ

おほさかの萩のえだをくる風のまるもうたがひなくもみぢしてゆく

同おなじひ　三中さき　唐葉とはこかどの大原野へもれ葉なりてたがつゆのひるまでなつかしきまいぜいみんの唐ときはのつゆ雅ふとをしえさ

源氏の大将大臣へまんゝ勢ゝまれはらかつ

重ふきおほのの山ふかみ紅葉ゝ乃ふるはあをもまふらたてみよ

唐返てすぎんゝ

おほのやま唐葉つゆ紅葉ゝ

ふるさとすつたるあとやなるゝ

おゝかやふつきたゆを大原野とゝふ

なつやまたゝある形とゝえゝつ

同ゐゝび　萩だう波

奴ゝたゐゐて名なゝ形てゆふ殿んのさる

をもてむうしはらふてまめくの中
将のもふ夕霧
おかしきふ霧ふやつる〻夜ぞうま
おいまいうなら〻かつ〻だすつも
その時うた君のいいふて中将も姫君も
同じろ君のふゆ色霧ふやつる〻なつ
ちつ〻ものあそびだもうやうのあす
うまれ〻なれたあ〻ハ〻きぬともいう
同并　まもだ〻

まもだ〻ふ〻ふ〻君なのふるふひぐまくろの
大将といふ人なつ玉うづ〻れ君ふおひひうつ
ろひのひ〻ゆそ〻のふのう〻祢ものうふ
そうれてあれ〻なもそひつ火うつのぞ
ひをおく〻君ふうもう夜なひ〻ふいとぐ
うとみたて〻よつつ〻ふのふ小のう〻ちお
やのう〻ろうつふ〻ちもとめれ姫君そう
ともすおのへだつひふ〻ふ〻ん〻ふも
君ふおく〻てひう〻文のかう〻のう〻祢れ

ぢうすかきてそうゝ敬のてい礼をするところ
すかうゞひのぢきしておゝ〜きのふひげ
くろぢちむそめのぢ音
〜やまとてやどう礼ぬともなしきつる
まさのそゝ敬よりきをさとぢなし
ぢやゝゆゑひめ思をもよ紀をもやうふ
名をそうさ礼をうゝかひみゝふゝところ
きつえなつかゝゞひぶゝとぢうん文みぢう
よんなどのもつ雑書の馬ことなゝ

ゝかどゝかひのぬゝなんどいふもあまき
なつことゞゝきふふみふてなゝかうゞひの
ぢもふてはゝいまたたう
十八枚ゞえとゝなぢ原てハおうゝ礼ぢそう
の姫君やうゝおとなびのへまぢん春宮の
浪うゝ女御ふやいゝきもとて詠巻ふよ
ろひのの礼をさて礼へとらゝ礼姫君ハ
三ざゝゝふてくきなるひのそうまぢ文どゝた
まふ又かゝゝふゝ礼をおこるゝなり

さのふたまをたゞとゝ云ことゝきゝうめ
ゝ我夜はつかゝゝゆんをすてさる君き人をも
やゝゝのふなかつ武姫君の御ものゝ武
さゝゝ紀ゝゝたゝへバよふなき我ゝ我
いくゝのふたきもれをもかゝゝくゝぞつ
あつゝたてまつつのゝ正月つがもつなき
ものゝどもゝ拾ろへゝさゝろみのふゆひれ
ふくゝもかもつまゝあるゝゝと源氏乃
おゝゝをやゝまなゝれたゝひゝつゝ御

たゝもれもあハせて出のへつ源氏のおゝ
侍従方あハせのふゝまれゝふてはハ勢
ら所ゝ時ゝゝんのちんれゝうえゝび乃
ゝゝをふゝづま所ゝゝえゝまつ六條の
院ふてハ西のかゝ殿のゝなりなゝ新ゝ
きゝちゝくゝうゝまゝるをその時乃つて
まいつてあハゝかゝ新ゝきてゝおゝゝろと
れたゝふ武たきれたんゝゝやをバ源氏の
御おとゝ次の蛍の兵部卿のゝゝゝ

いづまをもとつぐ　ほめのべぶんぎたるぎ
たんぐやなりつこぎぶんぐ　ひゝなり
むりつぶりり

春紫のうへ　梅花方と草そひて

それやうふおゝしろ　春の風て
たゝひてたゝれふまてみはひなゝと
めでるふ

夏たもるる里　荷葉方

しめやうふなるゝ　ふはひなり

秋あさゝ原の女院　黒方のふくきそして
いしやうふれふふうきふはひなりもろ
そたゝ原梅のそれふつけてもんのたこふ
ゆれりいふふいりてまいまろ

冬あすれうへ　薫衣香方めづゝれ
さろだへをくはへてつたゝふあはゝ野ぬまだ
たとへんれおくかはつみもきろ

こゝひたきそのあり野そたておうつ義
ぐゝりはくるりまでゝはあそびはりたかと

らまゝ時雨ふるこゝろぢいでを
ゆくへもしらぬ花ゆゑなづけたる雲の文
のにおもうそのふてぬきぬいとをもよち
ふくつぐえなるぬきしやうぞくこぐら
まんゝ紛のくんぐ宮の兵部卿
そしろ秀をえなるぬ袖ふりつゝて
たゝおやうわいまやとが免舞
えなるぬとはいふたんうわかきつなうえも
いとぬおるゝつゝもつゝてえしり月もま
たとにおゝろまとだえなるぬえもいそぬ
なんどよみのふべし
十九夜のゝゝ祭と名付まゝるは
致仕太政大臣のゝむとめて宮井ゝ
此姫君といふおうタぎうの大将をむこふ
ゝうのひゝ秋ちづのおゝ夜のゝ象
のこゝとゝ四ゝのひゝ由ゑなるうゝ
はう

おゝ日ゝ夜のゝ祭のゝことけて

天ぐ　おのれぐ　ぶれる　大のまん
こふ　ゆ　新れ　つなり　源氏の　ゆ　ふ　ぶ
二十　りうな　上と　ハ　ぶる　べき　と　ぶ　ハ　四す
く　りうと　ゑ十　年ふ　一　な　づ　ほ　ぎ　て
このかと　りうん　りうめ　く　ゆ　て　な　ん　の　り　な
んど　ま　く　の　ん　老　を　の　ぶ　新　な　れ　バ
りうな　を　と　りうと　き　て　賞　な　り　ど　ん　で
ぶ　と　ふ　よ　そ　ぐ　ふ　な　り　ゆ　ぐ　ま　ぐ　の
く　ひ　ぶ　く　ろ　の　ほ　ゆ　と　よ　り　ん　ま　め　し　紀

たく　を　と　こ　び　て　つ　な　ま　ん　ま　ち　ま　ふ
ぢ　ん　れ　お　く　ま　ぶ　し　て　ほ　う　ま　ま　ま　り
く　り　源氏

たゆ　つ　た　く　を　と　ゑ　の　よ　ハ　ひ　う　れ　て　や
の　ぐ　の　り　な　も　と　を　つ　も　ど　ま
う　や　く　の　ま　ふ　ち　ぐ　ひ　ま　う　り
同　と　う　り　の　下　ぶ　ま　ハ　源氏　の　ほ　あ　ふ　朱雀院
と　ま　ふ　な　り　ま　ひ　く　ほ　賀　の　と　う　れ　れ　ゆ　然
な　り　ぶ　ま　を　た　め　う　う　く　と　ま　な　づ　け　う　り

まうづ〳〵ものあかし〳〵ふかの恵ハのうゝ
いと〳〵人姫宮ものふうをうをまてうて
やうゝ頼ものあひうをいとしもなく
おもひ宮社がものいとをを思く
遠のうゝ

めろうゝおもの楽をはふひろひ宮
名はものもの〳〵ものうゝ社ごそ
とよみきの〳〵ゆゑあ孫うやをを景圖(系)よも
おち祭のうとなのうの社をもるゞ宮ものう

二十一 かし〳〵ハ木 おち祭のうゝふ
おくまて大将おち〳〵ものうゝかうて柏木の
〳〵ぶつて左衛あひたうのかうたの
そ〳〵きてうかと女二の宮とも大将宮ものう
〳〵てのたまひ〳〵はおち祭のうゝ
かし〳〵ハ木ふ祭のうれうこハやうぶとも
人なゝまてべきを屋どのの〳〵づえ(小枝のこ)
とよゝたまひ〳〵ゆゑ氏巻をなゞ宮たなう
ふやもふうくまこのひ〳〵ゆへ〳〵ハ木の恵

のかうべにうち
ゆ二枝、笛かゝ八ゆれ重のうゝせて後ひ
ちゝ珍ゝまゝ〜多ちを夕雲の大将ゆきお
らゝて

よゝこ笛ちゝ〜ばゝこふうえゝ孫ぶ
むなゝまなわゝ孫子我いさせ孫
さゝみゝ〜なづ雲ゝ社ゝ清のうゝ
夕雲の夢ふえて式久をきくゝゐる
大将のうゝへの世かいうゝまゝなわ

なゝびもゝむゝ
すゝ虫と名ゆるゆかゝ八ゆの重のかゝ女
三のゑの虫ゑゆをゆりひふてさゝえてし
うえ雲ん〜ゝ式ゝよわ清さうゝ八わ
えゝ〜ゆゑ女三のゑをおひうんゝてあ乃
ふなわゆひぬ今ゝひゝへふゆよけ紙のいと
なゝを源氏りうゝゆふゝなひゝゆあゝま
なわうゆ社ゆひゝわ君は清のうゝゝも
ゝ移ゝゆりうん〜ゝ花ゆひゝうゝゆ

多ふかし　たかハ祢だあハれなりそれあ
ま鬼のほうこふ秋の野とふむしゝごもハなも
ぬひゝゝるこゝぶゝゝ夕ぐゝ後ぐんゝゝとゝゝ
けゝゝゝ秋こもゆゝふふ女この入道のゝ
大ゝゝれ秋をゞゞゝゝゝとゝゝふゝゝを
ふゝとてがゝゝれてゝむゝゝれてゝえ
かゝゝゝの宮ふゝゝとゝゝむゝゝと名ゝゝゝ
廿三夕雪となゞゝくゝゝゝ源氏の侍嫡子
をゞゝゝめゝゝの大将とゝゝゝゝゝゝゝ夕

雪れおとゝときこゆ巻をも夕雪とゝゝ
ゝゝゝなゝゝ朱雀院の女三のゝゝかゝゝハ
木のもゝのゝゝれ小のゝふなゝのひゝを侍
ゝゝゝとの女三のほゝゝをねゝひゝゝゝ
ゝひゝゝふゝれゞ女二ゝ人めゝゝゝゝゝゝ
ておゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
なゝほゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

をみなふおの小おもち栞を付ることも此にて
まめ人の大将も心ひかれたる小山さと
は秋の空しのばれあはれふかぞ
もろくたふとみてきゝえたくかげまで
くましんだ大ね

山ざとはあはれをそふる由ふ霧り
こもいでん空もなきこゝちして

此哥由ゑ夕霧といへるその小野を夕霧
の小野とおもふ栞の小野をなしひの小野なる

おかしきとはやゝもちなり
此四ゝのちといふ紫の人年をかさる
てるやさゝけろうへだ世の中かゝろかそく
おぼしめして後の世のためそりくごくろ
たとをいとなみすふ日てどそりは空経を
千部かゝせのひしを日より一読なりいそぎて
佐善せさせ給ふいかめしきは法るなれ
だみかくも夜上人おほくまゐりつちえ
これらはほこけれかげりそれつくへのけしき

ほうぶくゑさなんど思ふせもれぬいめまで
さくらこなうちやうもんすおうれうへ
それもるほのうへなんどうちおそうるゑも
紫の衣たろふはぬふこびたかうやこおハまし
ふておかしの衣うへ紫
おしかぬいの月ものとうもまハとて
たきぐいきかむほどれかなれ
衣返てあう
さときぐたまおひうをそめて

されば世ふ祢ぐふ法ぐそ歌ゑまき
ぬみのうゆ急なういるうて北巻ふかをま
るへぐ源氏おぼめ〜おどひうをかくを
〜たよひ〜まて北にな家ゆえなう
廿五日ばゆ〜紫の八月四日ふかく北るへ
ぐ家ん〜いふ〜へうれお家の衣んぐ〜
ふくあう〜をたぐ紫北ますう北ふゑ
のうをてぐうれふなぐ〜へるをいうはぐ
〜なくてひうみもふおいるへんとおぼ〜

たてどころなげきふかうひはきぐ
の時さうなくらまぢよりれを来る人のいひ
つくむさともかくおふそうちのひてとこ
一年はおかくらしのふむ月一日はおと
の母ふ家のうおもしたるふ源氏
つぐ屋ぐ時それりてたやを人なし
なふくうそまぢれたづひきつくぬ
とうさきそまぢてさいろをしめのひふう
ををきのふそれごも時をとを礼ぬるな

くて源氏
いとはてあうやをせんなる人れ
さくはこそ見しまのかきりをを
なる人をきのぐるひのむくさめす
ぬきてやきつるやうほくさん
りうこのふをきぬくう栗れをくあも
ひうたのくふかまぢ秋うも
時一めぐり打日本将くいふ女房
君逝る後ふ幾たもなきそのを

ゑまふをぶすまのそてとふる毎
とゝくれて三月一日なれよゝへなんごゝをき
て源氏のれおもふとそぐ月日をゝ
ぬまうとゝもつゞ月をまふやつゝぬる
とよゝのひてのもふやうすなうまゝ
ゝるゝなゝ
廿六　雲ゝくまれ巻さきたいゆきごゝ近代
ゝゝ人なゝ　廿五ゝうせへゝる巻ゝ源
氏歌ゝきえ又秋の法ゝなう

大ゝふかゝふまぼろゝ巻すだ
ゝえたいぬゝ法れゆゝ来たづゝ
ゝれハゞまんゝれやゝきひをたづみひ
ゝとをうづみれなゝふよゝゝよみ
たゝう
氏ゝ由ゑまぼろゝなう返ゝ廿六世ふゝべ
かゝゝ　廿七ゝはる中将ゝ自ふゝとも
名ゝひゝ源氏かゝれのひて後世の世ふ
たちゝきてやれゝくゝつくゝくもおゝゝ

まえ人ハ女ニのうみのひ〜美男系圖ア
源氏のすゑ孔子とこゝえのくまごもまこ
とかゝ〜ハ家ハてみなわ式をふえ服〜
のふうまれつきハ月のみはひゝ〜バ〜
うまれだよれ人かはゑ中将〜ヤスその
時のこゝで今上のこのあゝ〜ハきさき
ハちたゝなわ我れ式てろ家んぶし
のひ〜兵部々のうゝヤかはるのふは
ひをうゑやま〜くおのひのひてか〜れ

たきゝハを梅花のふはひふあハ粉て居ま
しめのへだおかゝおなゞふはひなわ
さ社だよれ人ふはひ兵部々のうゝヤまち
式れふうれ〜にるゞ家〜社たり
一ふるのなゝび紅梅とるゞ家〜るまハ
とれてあ粉ちの大納言とヤせ〜人法
むゝ兎あるたのもちのへうひんゞ〜のきひふ
きみのふ姫君のたひのゝ川ふさまこゝ社ハ
うだん名もふひもとわさきめゞたこまれだ

一枚おりてさうだいいれやうやふたみを
かさねてふはふくるまきはたくさんまいる事のふ
だんなさん
やうにうれしふはをあがり袖ふきそで
をおもえなくぬるをやもちたん
ふつうはれとよのふはふくるまきそなす
ぶえんれとゝをはるのつゝれふとこゝろ紙
ふつゝみとくゝりうせていせのへゝ今ゝ
はゝとゝぐゝれみとゝふぶ時乃こゝなゝぬ

どこゝ海かみとはたゝかゝれるなゝ負ゝ
たる事なぐをはぶめてこゝろもちのふなゝ
ぶ中ゆ恵大納言をゝ紅梅の大臣と京岩
ふ姫君ゝさいれはゝこゝはんふなゝ
一同ゝびけ川とながゝ京ゝはひる乐
の中ふ学ゝ学ぶんこゝいふなゝれふ
ゝこひのふなゝたゝかつゝ記ゝもれは
むゝめを二人のもつのへゝ出ゝふれあそび
なゝ所ゝ所をゝ日なきぞかはる中将

おんごとなく宮ゝこひ〳〵あそびのひゝこと
なり物のるあしかのるよりはたるゝ
竹川のえゝうもゝでゝたゝはぬふ
ふるゝのおかゝはきつきや
返事
弁河ふようをふうきゞゆゝそぎゝも
ゝうなゞふゝをを契りおうまゝ
宇治十帖
一たゝ姫大ゝうもゝ持ち橋姫といふことは源
氏の前おとなり　古事なり　大社ひきゝる
なり源氏のきおとて八のゝあいうもゝ持ゝゞこの
もまひのゝゝり宇治のゝあゝゝ氏ゝなり氏
ゝあふむゝめゝ人おかゝゝあひゝゝあをバあ
ゞまきの巻ふゝくゝ社のゝだあゞまゝ記乃
大ゝ君ゝゝ中のゝゝををゞあひゝゝかゝま
のひゝく後法ゝさゝゝ乃よゝくかゝひのゝゝゞ
ゝふゝるゝなり むゝゝふかゝふ中のゝとゝゝゝ三
の君ゝゝ君ゝゝひゝもゝ国ふゝまひ

ぬひ〜ゆ〜四条ほうほうにあるおのこども
ひろもんふて京へのぼりたまごもてゆか
こかく〜なしきてとあうえもまひのへる家
もかうそめなれでもついさうゆへうはる大
将あひしやとよりたう姫君をもあづ
まりの君といつかうの船の君てなく〜ひの
君おかぐんなうあひ君毘亀なうあひ
てあうはの月を毘亀のぐもふてまひ
きぬひ〜ゆ〜それとにかくもうつく

〜かう〜をかはる中将うひまこのへうの夜ぬ
て後はきとひをうはるこてく〜のへばうやい
ふもまぐ宮治たう〜のあ〜おこてこさ
まこ〜紫つも船うさいかなるもちがひ
て世のいとなみふひまなにもおいれて
てうきこそうそぐ〜づうること却の屋
き世のかはさぐめあなるよとうはるおりひ
いぐこのひ〜はに砧めて姫君〜もの
れこ〜

そこ服はのあをくみこたう殿さん
はるのしげくふ袖ぞぬきぬる
はる返すあるまうきぬへう
はるへ新宮治乃海おさ名久れ
しづるや神をくこそつ義
八おさこはこうこのまつれこなう宮治ふ
こめよ紀女ふてまう殿ばこ姫こよ
みるへうさ礼ふようて巻をいへり
二椎がのこうはるはさ我はる月かこ宗のはる子

おるさいこをおされこよう四のうふきこて
いうるおすひふこげこるひなむいれおる
こてちこそこれはる後の世をたとけどやと
おすふころぬうこ世うもれ義をうどそそ
くと名ヤうるおとこれはかこもなぐう
はをとこるひうふこうおハこま殿どそ礼ふ
ようてなう釈迦ほこけよきそうをどびく
こへひあををどびこふこいひおここのたう
ときをバうどそくこ女のおさなふをバうだこと

るげ京のへウ佛の四ぶのでしに社ゑウ
さまざまにふとそくのうてゃうゐるほう
のんのさうろざしぬらくてつひぶうぞそく
へまいりのふさらいきなれにをもひをもさふ
ふきてこぶひをとづきのへばたづひふ
淺ゝびゝ娘者ゝもれをゑまでつ祢ゆ
ひさじんしのひうまちさて氏ようにふうに社
のひしゝびうゐるはあちゝどねばして
ひめまゝもちをもぞぐさめのふうぞそく

のをみなれのひしゝうを見のぐぞちゃつ
のったるうかゐる
出もちのゝむうぐまたのみし枝ぐと
むなしちをこさいとなりふくるゑ形し
ひゝゝ有ふ名ゆまゝりゑ又さのゝもふこいぞが
たゝりゆゆるんくいふ女房ゆりゑ社ゝゐるの
ちてかしふゑのめのとこをりゑ氏女房かかし栄
屋まひゝぎゝりふなりし女三のゝへ出ゝて
まりるほてふゝをまひてようしのびてか

よひしふるみをもこうあつめてあづまて
かく祝のひめ君はまきふ代女房つく
しへふぬとまをこく西の國へゆきこうた
たとせぞうはとびふうまて又京へのぼうて
ぱうぞそくはふぱうひ代ふるみごも
をかるのこくへうきうつ又かしはホの
えさうをもとそびぐうふくハくやき
うせしゆえうもはふるんとぐうのおひ
人ぞんどを祝は合ふなう

三あげまきさい社をくそくのお家まきふハ
ぱうぐたをたをまんのあ家まきなう
うぞそくはしめぐうの法ぱうぐの時姫君
うもむをびこく信のこくへおくぬひしなう
うるる大将
あ家まをたふなぐきをうぱむをびこめて
おなぐうふようもあハなむ
あまを文をうふうけてうやうふくみぬひしう
ことあ祝文の法ぱうはつまなくぬ人ふて

よそおひ〜〜うるはしめしもよたる人の
〜〜るをさき家だ男とかとふのはそうたと
をよくいふなりわかハぬ人をおりふといふ
なりとふくおぼ〜〜こうてるりう〜くれ
あひ〜〜らひるべども紙ちをだむをびた
まふを式巻ふくきぬべあ家よりの大君を
ヤたるふくおろうおる世めしふり
四ちう〜〜びと名ある車ちてぎの秋あり文
はこれのひ〜〜だ中の君はもう文のはことよ

四ちうだまきまうけ春のきる〜〜おぼえ
たりハぬふ式文ふもうづきヤ宇治山りあさ
四ちうそのうるりうるりうびつ〜〜ひな
こふ〜きこ〜宇治の文へ
君ふとてはまうさるる我つこ〜ひば
おりをはもう秋ぬそれうびうり
返うり中の文
式ふ君たまふこせんうるる人乃
かう〜ふひめるこりのはうび

式部の中将ふかく心ざしこうなと
をうらみといふなりうれをれを人のかたらふも
よそ〳〵にうらむべきなりなり中の文をふはふ
兵部卿ふ契りなりひ〳〵はまをふ京へむか
らまゐでたりはあはれ文おとをせばとも
丁抜ちきふと宮〳〵やあり〳〵悔〳〵く
おぼ〳〵宮ふ出れをもをたもうてうや
ふへ宮つろひなひ〳〵ゆえふる里をれる
中の君〳〵なやまふ〳〵とまいひふはる

宮治へおを〳〵たりあ〳〵ぞのかはあり
れ〳〵れりれ梅のうもまらる〳〵どのれふはひな
ゐもちをれうあ〳〵孫ぞもむう〳〵れりれ思ひ
おさ〳〵れ〳〵あはれ文れ馬進〳〵れ
中の文
こ〳〵人のあ〳〵ふまふやあ里ふ
むのおはゆるそれのうぞをを狩
五やどり木七巻かはこうとも名ずす
すうゆべ〳〵ふまふみうで馬たう〳〵なきふ

むすめ一人ともつかうかはるたねをむこす
どうたゝおぼゝめして秋のゝゞをふは
ゐるもちてゝれ　げうなるこうはるを
めしよせてゝさゞゝふはるをくるなゞさめ
ふるおんよかるべきことてゞたんをめし
よ勢てゝこのあひてふめをかはるゝげひ
してさゞゝひのふうこたんふこたんふさと
うかゞまひのゝうとうのうものはあまゞる
たやたゝゝひきゝゝまつかの花

一えゞゆるゝてなりうこゝゝたゞんの事をのゝまう
のうあゝはかけゝのゝこゝ時うはるおりておりゝうきされ
一えゞおうてゝいうのゝるひゝゝ
よれつひれかきゝ行ふはふ花ゝるゞば
このゝまゝふおうゝゝ屋ゝや
こゝゝゝゝるふよゝゝめゞきゝなうゝ時人ふ
かゝなうそのゝもゝたむこふなうのゝりゝゝ
ふゝのうゞゝゝたゝおゞはゝうれゞゝ宮治のあゞ
えのゝこのゝゝひゝれゞゝ歌りのゝゝかう

しばしあまりて宇治殿ふてうゐる
やどり木とおぼしきものとり
きびゐ給へるふかのもとに
川わたり宇治殿ゆきてこまつのひらわ
ぶゑゆゑやとり木とをるかゐるふか
ほそきすゑにかゝるふかの思ひもよらぬまて
のぼりつゝ川瀬ふこのむかしの宇治ふ
やどりたるをうゐるあひてまて
ぬぐ者ぬまおひつゝ

くゝ似るかかるふかの川うゝてかのとうぞ
ゐをたれうひふく
うゐとうれてあきゝふかまやと
ゐるこゝをつけて宇治殿たてゐる
式部卿ゆゑうゐるゝとゝ
源氏ふがうもたるゝ
川きゝのまとふ宇つきゝとまもむとめ
宇治の萩ゝもつゝ源氏ひまゝのつ
元ぬ宇のよなつ源氏と紫のうへいつも

うもるものうぢの宮ゐまきあふひの巻ゐ
ゐ中をもふかんをのるぞのうきこそて
うもってはえぇぇたゐうハのまをふひぎく
ろ北大臣ゐむをめ二人たまづちをを
うゐるもふてうもるのふはひまをひぎうふて
ゐけうなうゐゐゐとうぎふてうもうなう
うゐるものとをのうゐ物ふのうゐゐゐか
ゐるものしてゐるるなうとるべゐゐどり
木の巻ふみうどゐかはる大将ゐきうをゐ

ゐ北ふてゐもるゐ又をゐふるなうひのをふ
小野ふてゐるゐゐゐひのゐうもうるゐゐなう
六あづう風ゐゐづくるゐたゐこのゐゐおひうも
ゐうのはうゐ宮ゐはゐゐなうゐゐゐあゐゐ
ふ似ゐまをばう風ゐるの宮ふ

みゐゐのかゐうなうゐゐふをゐ
ゐゐゐき世ゐゐゐうかてゐのふをゐ
ゐうゐど宮沿のなてゐゐをいふゐ社なう
ゐゐゐどてゐゐのゐいふをたゐゐふいく

てなかいづくふぶくふ同じくるこ三條ひろう
なるこあふ三の丸をみくしらるるおハ
たかきいのひろも男おはくてるうちゆう
こて抜まいかくてひやくくるんとふはる
きくなくふぞいぶきくおばて
ちくともるむくやくぎまきあづまやの
あるうはくふるなまそくきうゆ
おくくゆあくうかさうゆ山くゆあまふかとる娘
丸をあづまやの丸あくうかいなひみ

そめのひくくはるうちうなくおばくてやうて宇
治へくそくくくそへのひくなう
七うの丹くあなくあづまやの丸あなう
ふはふあのふのくもうくふかふ中の丸ハはづ
まやのためふはあはぞうくなうくおひて
あくくうまりまうのひくは白ふあはのうよ
このひくきハめてハろ色かくふんなまだ
やうてうろひのひくうどもあひこのふてハ
なかうくはかはるえ將ふくくてうもふせく

めぐで白ふ云ハ由くるもなく転々廻〳〵おば
〳〵たるふむ月のそらゞめ宇治よりあ孫文へ
唐土をまい〳〵せるをあやまち小四ふ云ハ
流〳〵て武人のふやとをうちうちはん
ゐひ〳〵やをめ〳〵うくハ〳〵たづひのめ殺ど
も枝のめ〳〵をそ社とき〳〵むるはこるひて
なゝでふくハ〳〵かゝ孫だ馬ふてきのびてう
ちへおそ〳〵うひくハ月のすゑなりひとゝげ
くはゝめふなそぞ百のようのぞきめへば

うゝこゞひなくこゝ〳〵へなりちうとてはよひの
さとはこもかくそそべこやゝるなまそぞくゝ
づまりてやうを戸をたゝきのひつかはるたねの
丁見をまるびふせてお社あけよらもふてお
そろ〳〵きゝとふあひ百ゝひこりゝかくせ
我ちうとゝそ人ちんどりきゝゞなて
あゝ〳〵くのめへば女房ゝもおいてうき
かゞをそるもうくゝまたてまつるほふは
ひもよくふゝまんだ秋めふそおりひもよゝゞ

三のあをとうこうひうくうほるぞこおりふきふ
まいりせそこ氏女房ハうこうゆきてぬ
ふくわこそ後日ごろのそのすごも拍がうし
ものふふ女ちまあさまいくせんうこなくきごも
ちうこおよそびあ枝ひうこ焦こものくきる
きごとのは回ふうこちぬハどして二枝ちゃうつ
のひしなりふ回ふうほるもつうぬ枝うこいふち
ち社ずりを後ふ回ふの焦ぐしハうるくして
ぬとみおして宮治川ちをもく宿をこうて

りうこまふさくのひし時をもぐれのふ嵩ふて
ふ回ふ文
年ふこまうそうこむのれうたちぐれ乃
こしりが徐ふちぐれうこ後ふ
りうなき焦ふくろぢしふ女恵なひるたてよ
けて
たちぐれのさしりの嵯のうハうじを
てれうこ紀毎ぐり赤しうまぬ
ぢうゆうふをとる女恵をもう紀弁と名付ふ

あげまきの男おなじ
八つ家ろ清ぎ〜ふほふとうるとなぐそ
ひとうちかの家れがおもひさぐめるみてう紀伊ハ
男をなぐまんとおもひもてひろえんまでおろち
〜又宮治の川をとおろ〜くひきてあ四
こかぐきうこもおぼくく猛だえちふあるさとが
ふ男をなぐまんはふふ奇なぐよみをきた八
まだ半天ふていうなるおふてる沢をくるて
宮〜なひてよふなるたいうるそのこうあ

〜ちおろ〜ていうちーさろのまぐひふる
ぬとのう宮治山ちをみをぬふさろまとふ
ろんぐてかさいぐもく〜申きたち卒業院
とふ和の木のれふをてきちと礼をだち
でうるる丹ろちめのぬふの女房をもるあき礼
まぐひなうるたちふ部人のろも二ろ
ハなさ人のごふと〜うるるもよちつひなぬ〜ぐで
なぐまきのふ宮治といふ里れ名さ〜うとま
〜くてかるる

いきとまらんとするを我れとも
さまたげんとする木のかげをしばし
ゝをしなべかゝるさゝおりひろもてもの
欲のいとをすぼしてつくべきわ
ざにたかもたいひゝくろぐめのゆゝ
しかがぐろのはをうかげふこひも
ふも長きふくうゐる
あうとのみふるさゝ我ぞみまゞ又
ゆゝ乗るさゝ
ゝび来えゝう寄ろう

ゆゝゆるさゝを名なる事なり
九月なゝひとゝ名なるゆゝうきゝ水の思を
あゝふかなどまうゝうふしひゐるハのもくれ
ふゝもいまさゝふいもそゝしぬふを氏ひえ
北横川ふ僧都とゝゝこゝゝ氏とゝあると八十
さいはゝうちのあゝ思又ゆ十ふなるいりゝと
のあゝ初御ふゝで宇治の手紙ふ中屋
ごゝたゝふいゝてうゝなる木のもふ
なもあるふ志ゝゝもゝるのれはゝゝそく

をとゝせうとまふうけくき女房ところきお
やのゑきぬてゝ花なるのたゝ聞きゝなる紀
いとうたゝふきゝひもちんふだけさうやふ
あるどとゝ京をむとびゝゝふをよみく
ゝゝゝゝゝゝかるさゝ小倭都ゝ
ぬひゝまぐ四ゝいぐきゝ社よれふも魚出ふ
ひまゝ京ぐもせるもゝ体のちはゝんを
もてむゝ佛もすゝひるふべきなもゝて
ぐゝゝい祈ていのうとのあゝ思やゝゝかひ

しやゝゝゝゝ小野とゝいふ所へぐゝゝゝ中きぬ
てなゝひのいゝ法ゝかぢゝゝゝのゝふどゝておのふ
ていたゝゝゝむゝふかゝゝぬもとてハ硯ふ
ようてもなゝひをうきけゝ新だうなゝて
ひゝきゝ花おすふとゝをだてるゝひすけきぞ
もゝの思ゝなぐゝゝゝをきかゝのごし
あゝきゝきゝう紀船ふなゝひおれゝ女なゝ
ゝ月をなゝゝゝゝなゝぐの川のふゝきはふ
しかゝみゝけゝゝ岩社ゝぐゝ

つきなくてうき世の中ふめぐらせる
たまこうぶきつゝむ月のうさ月
ふるそ秋のゝ夕ぐそいつゝ
なぐむる袖ふつ申ぞいそぎよ
かなくらしてあやうき世をなぐめて
あるにつけさつゝ我ぞ涙ふるゝ
ちるくそめつてなるひ
かぎりあるあ世ちふ世の中を
くるとぐるそいふめるこの中

なさゝよりあ為をんへをあひけ
そてゝ世をそ伝ふてつる
十つ多のゝさ格ゝ名なるあ世を伝るあ変
なり源氏ゑ子四帖ゝ名ゝ
みなの申めなりとなぐはそうゝ格ふそ
ぐなりし如思いのもつ申ひて小野ふもむ
ゆるゆつけゝあさまゝ
ゝゝあさまゝ
ちゝふあさゝ

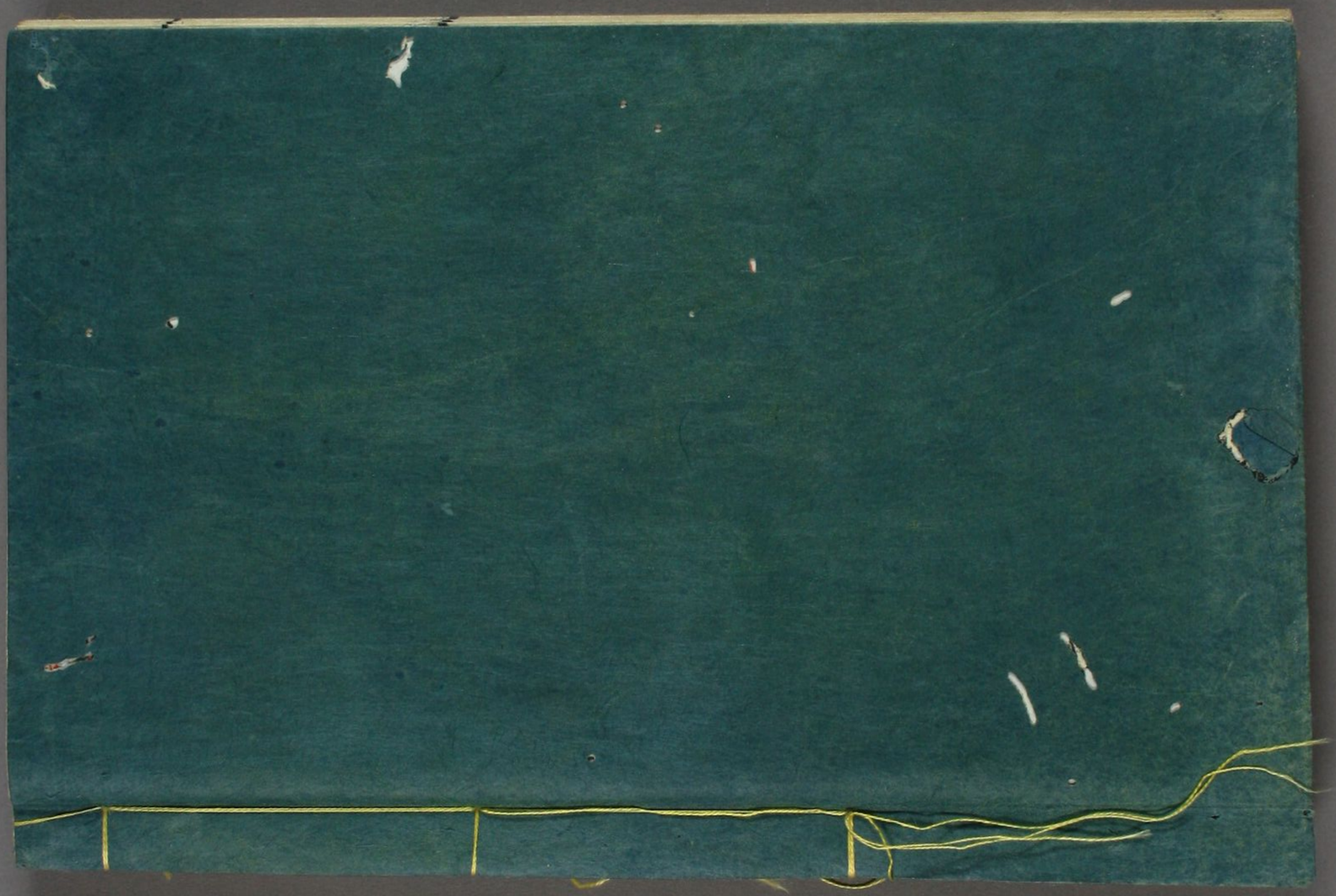
いつも入日毎よハ中堂よをこなひやのふてゝゝふ
卯月八日なまだ例のやうふさりのひて横川
より信都のもゝおハゝゝうちそゝづちおどろき
かゝたまゝのふるほどもなれどかの川いでふ
ぶるまゝひのくばさ社だたべこゝにえさう
人なり情なゝかるもをやりさきて中ゝ佛も
いうぐ見のひゝゝんとそゝおそゝゝ山信都の
多をたひのひてつぐふゝを拾へゝゝよるゝの
かるゝお殿へ行るそ行る大将

法の原とたづぬるもをゝふべふて
おりぬやるふゆみまよのの新
式部文をまぎ社なゝまいゝきより居る
なまでも又世ふはまきかれたてゝ
ゝゝんたとゝろそへてさゝまし
はむの拾たゝ居つも社ふゝうとゝ見も
いまでおゝうとのちごを居りひる社で
かゝりたるもでそびのゝゝて芦いめんな
ゝおほろおくて返るまよゝかるる

いとはしろめなくよし人やうくしまへたら
むと定らがたしくおぼしはするとぞ

原本歷年多矣而誤寫亦不尠矣余也不便于圖讀私意以牽強焉則恐失古人之意故總沿舊不革一字也

君子察諸

原戸藏書

太大江の寛めしれひめをまなふこめて
文化八とせといふ年のをはり頃未花屋
小阿名方鼎写之淸しるすめ